

## パネルディスカッション D

## 学校教育における環境問題の学習と指導

—藤田 郁男氏報告を受けて—

高平 順夫\*

## 討論の部

司会：先生が実際に JICA 等のお仕事でいらしたフィリピンやデンマークでの環境教育の実際をお聞きして、環境問題に対し「気づき」「理解し」「参加・行動」するというシステムの上に環境教育が実施されている事を伺い、日本では「参加・行動」の面が学校教育の場から完全に欠落している事を改めて教えられました。私どもの学校の横を創成川が流れています。札幌を南北に分けている大通公園は札幌の東西軸として確固たる地位を占めているのに対し創成川は、兩岸をコンクリートの壁で狭められ国道 5 号線（創成川通り）のたんなる中央分離帯にしか過ぎず、川としての存在感がありません。

札幌建設の原点ともなった創成川を再生させ私達に取り戻すために何をなすべきか、まず川の現状を自分の目で調べ検証し自分たちなりに再生案を探りたいと地理の自由研究で高校生が三人共同で取り組んだことがありました。

検証の結果、車の往来が激しくて機能を果たしていない児童公園を若者向けポケット・パークにし、樹木も増やし緑の回廊の役割も担わせようとか、機能一点ばりの 20 の橋、欄干のデザインをここを通学路としている小学生から募集し、夢のあるものとし、時折真鴨が羽根を休める川辺に関心を持たせ、そこから川としての創成川見直しのスタートとさせよう等の提案がなされ、その後市民グループのワークショップのたたき台になった事がありました。このなどは身近な環境に具体的に「参加・行動」したことによって「気づき」「理解した」ことにつながったことなのだろうと思いま

す。

また、私ども中学一年の地理授業では一学期の大半を野外観察授業を中心に札幌をフィールドにあてています。そこで、固体・機能、関係・比較、分布・領域の各観察法を通じ、いわゆる地理的なものの見方・考え方を養うことに時間を用います。

実際の徒歩による巡検では 1. 地図と仲良くし、地図（5 千分の 1）の中で迷子にならぬようにしよう。2. 隠れた自然サクシュコトニ川の流れを北大キャンパスに見出そう。3. 都心ビル街の成立ちと役割（機能）を探ろうと、3 本の柱をたて 1 クラスを 2 班に分け初夏の一日校外に出かけます。そこで培った観察法で、自分の出身小学校の校区を基本として My Town Watching Map を夏休み中に模造紙一枚に描いています。6 ヶ年一貫教育の学校だから出来るとの評価を受ける反面、家庭までにごちらの趣旨が伝わらず一部父兄から「夏休みも含くめ一学期間札幌だけをやっているのか」との苦言が提されたことがありました。無論そのことをきっかけに父兄の方と話す機会に恵まれたのですが、根底に「教科書通り」の授業でないと安心できないという父母の思いがあります。

一方フィールドに出かけて行動しても知識を中心に問う高校や大学入試には役立たぬと受験が足かせになり、週 5 日制との関わりで授業時間確保もあり、市内の中・高校では巡検等野外へ出での活動が極めて少なくなっています。

新カリキュラムでも、中学地理 4 時間は 3 時間に減少していく中で、藤田先生のおっしゃっていた総合学習以外に環境問題を「参加・行動」

\* 藤女子中・高等学校

するための活路を具体的にどの様に見出すのかという問題があります。

一方若者達の間で「電気は何処からくるの?」の間に「そのコンセントからさ」、「水は?」「蛇口から」、「ゴミは?」「外のゴミステーションへ」、「食べ物は?」「近くのコンビニから」と物事のシステムにまるで関心がなく、今があればそれでいい。環境問題は自分とは関係ないとの風潮が現実にあります。

世界各地で「アジェンダ・フォー・チェンジ」を具体的に生かそうと動き始めている時、日本のこうした若者や子供たちとどう係っていったらよいのか藤田先生のお話を基に先生方のきたんのないご意見を伺いたいと思います。

### 質疑応答

奥平：大変苦勞しています。火山は知っていますか。有珠山は、大雪山はどこにあるの、の問いに場所はおろか名前も知らないという学生がいる。全く基礎的知識が欠けていて、北海道でこうですから、釜石は?の問いに地図帳で日本海側を一生懸命探しているという状態です。

小中学校で地理を習って、あと高校で断絶しているわけです。その状態で大学に入ってきて地誌に目覚めさせようと一生懸命努力しているのですが、なかなか思うようにはいかない。

司会：ほかの学校でもこうした現象が起きていると思われませんが、いかがでしょうか

藤田：これから学校では発表学習が増えてくると思いますが、その機会を有効に用いる方法があると思います。今車社会で欠かせない自動車のナビゲーターを基に、楽しい有効な使い方を体系化し若者に示すのも一つの方法です。運転免許資格の中の一つにナビゲーターの活用法を導入するとかが考えられると思います。

司会：道路地図、ナビゲーター等手身近なものを活用して、欠けているところの修復からとのお話がありました。他にこの種の克服法、また藤田先生から先にお話のあった「参加・行動する」につなげるヒント等ございましたら教えていただきたいです。

藤田：NGOの会議で現地の活動をしている方から「地域に誰も指導して下さる方や助けて下

さる人がいない」と相談に見えられる方がおりました。現地には高校や大学があるけれどよく連携されていないのが残念です。

ある地域に一週間のずれでNGOとある学会の巡検があったことがあります。両者がよく連携し合同で行なえば、それぞれのスタッフの持味を活かし、より実のある巡検になったのにと悔やまれた経験をしたことがあります。

皆さんの周りにもいろいろな地域活動をしている方が大勢いらっしゃいます。どうか地域を見回し活動しているグループにこちらから「どうしていらっしゃいますか」と声掛けをしてみてください。きっと「ヘルプ」のサインが寄せられると思います。

小野：北海道地理学会には沢山のメンバーの方がいらっしゃるけれど、実際地域の環境保全のためのNGOや市民運動と関わって下さる方が本当に少なく一部に集中してしまっています。

札幌にも旭川にも人材が沢山いらっしゃるわけですからもっと多くの方がこうした運動と関わっていただきたいと思っております。

今まで私達が受けてきた教育で地理学はこうあるべきだとの考え方に縛られ、研究とは論文を書くことが主体で、地域の運動と関わるのは自分の時間を無駄にすることであるという意識が研究者の中に根強くあると思うのです。

そうではなく、地理学はまさに地域の問題を一つ一つ解決していくことこそが、結局は研究にもつながっていくという転換をしないと難しいと思います。うちでもやがて修士課程では今までのように研究のための論文を書くというのではなく、2年間具体的に実際に地域で起こっている問題に対し、自分は問題解決のためにどう行動し、自分なりにどのような研究をしたか。またNGOにどう加わりどのような関わりをしたかという2年間の行動記録をまとめると修士号を与えます、という転換を図ろうとしています。そのような事をやっていかないと将来の人達は育っていかないと、思います。私達と同じ考えの人を再生産していたのではちっとも問題は解決しないのですから、そのような事で修士になり、博士になり大学の先生になる人を育てていかなければだめなのではないかと思えます。これは北大だけの問題ではなくそ

れぞれの大学で考えられる事だと思います。

従来通りの評価の仕方だけではなく別の評価の方法が出来るのではないかと思います。それをもう一ランクあげれば、入試の方法も変わってくるはずです。今までのように知識だけで受験するのではなく、もう既に一部で実施されている OA 入試のように「あなたは大学で何をやりたいのか」等という面接を重視してやっていくことが大事になってくると思います。

すると知識面では確かに低い学生が入ってきてしまうかもしれないけれど、意欲があればそこをカバー出来るかもしれない。それは冒険だと思うがそこをやらないと何時まで経っても変わらないのだと思います。

司会：環境問題に対し積極的に「参加・行動する」人達を育てていくために学会や教職にある私達がこの問題とどう関わっていくとよいのかを考えるいい機会になったと思います。

ありがとうございました。